# 「中国报」（中国リポート　第十八号）

## おすすめ書籍（番外編）

～新型コロナ禍の出張不可能状態のため番外編：おすすめの中国関連書籍情報～

### 天安門ファイル　極秘記録から読み解く日本外交の「失敗」
### 城山英巳　中央公論社

著者の城山氏は時事通信社の中国総局（北京）の元特派員で、現地での取材経験が 10 年に及ぶ。天安門事件の発生した 33 年前の学生時代から中国に関心を持っていたとのことだ。特派員として駐在していた頃から、日々執筆する記事に関する記録を残し、その集大成として書かれたのが、「中国消し去られた記録：北京特派員が見た大国の闇（白水社）」で、こちらの書籍も読み応えがある。苛烈な言論弾圧の続く中国で何が起こっているのかを、時事通信の配信した「記事」をベースに、その取材メモのような形を取ったルポだ。

閑話休題。

本書は外務省が、作成から三十年以上経過した外交文書が公開対象となる「三十年ルール」に基づき、2019 年 4 月 15 日以降、北京の日本大使館が外務省に報告した公電を含めた外交記録である「天安門事件外交ファイル」（ファイル 12 冊、計 4 千 150 枚）を読み解いて書かれたものである。当時の現場にいた大使館員をはじめ航空会社の職員など多くの人の証言に基づいて書かれており、天安門事件がどういうものだったのか、外務省や日本政府がどのように対応したのかを知るのに非常に有益な資料である。

書名に日本外交の失敗とあるように、日本国外務省に対してはやや批判的な内容である。日本国内にいると外務省と関係を持つことはまず無いが、国外へ出ると外務省や在外公館というものが、かなり身近な存在になる。渡航先での何らかの事変が発生したときには、自国民を保護してくれる存在であるからだ。ただ、本書の「第四章　北京「内戦」下の日本人　第三節　六月七日北京首都空港」の一節にあるように邦人保護の面で不十分な部分があったというのは心細い限りである。

なお、この部分は著者がプレジデントで本文をオンラインで公開しているので、興味のある方は参考にされたい。https://president.jp/articles/-/59758?page=1

本書の序章の冒頭に六月四日の大使館の上級幹部の発言に、現場を見て帰ってきた大使館員とのやり取りが書かれているのでその部分を引用して紹介したいと思う。

『大使館に戻ると、館員が集まって騒然としていた。その時、大使館のある上級幹部が「昨晩はどうだった。大したことはなかったのだろう」と聞いてきた。南（政治部一等書記官）は

「えっ、大したことがない」と応じたが、その上級幹部がそう言う理由を、別の館員から教えてもらった。「昨晩、麻雀をやっていたらしいですよ。」南は危機意識の低さに唖然とするしかなかった。』

本書には、『北京大生の本音を描写した「片山報告」』という項目も設けられている。以前、ARC 主催のセミナーにご登壇いただいた現在ペルー大使の片山和之大使だ。片山大使が外交官補として北京大学へ留学中に書いた「『九・一八』反日集会デモに関する考察」と「中国における反日運動［九・一八デモ及び今後の見通し］」と題した報告書（1985 年）が引用されている。この「片山報告」は、「中曽根首相の靖国参拝を受けて中国で起こったデモに関する文書」を外務省に開示請求した際に含まれていたとのことで、著者は「反日」の裏に隠された北京大生の当時の現実と本音が如実に描写されていると評価している。

天安門事件では日米間の情報交換の面でも問題があったようだ。当時の米国の大統領はブッシュ大統領（父）、ブッシュはニクソンの電撃訪中後に設置された連絡事務所の初代所長を務めており、対中国では情報網でも個人的にも太いパイプを持っていたはずで、日本の比ではなかった。ブッシュ大統領は日本政府以上に中国共産党の反応を恐れていたことや、日本政府がこの時点での「米中接近」を知らずに対中政策を進めていたことなども書かれている。

天安門事件の映像というと必ず登場する、戦車の行く手を遮る勇気ある学生（タンクマン）の映像があるが、あの映像に関しての疑問点に関しても当時の NHK 記者の加藤青延さんの指摘を引用している部分も興味深い。▹厳重警備の中でなぜ男は入り込めたのか、▹私服警官はなぜすぐに取り押さえなかったのか、▹先頭の戦車が阻まれても、皇族の戦車が一列に連なる必要はなかったはずだ―という疑問である。つまり、当局側の「自作自演」の可能性を指摘している。

なるほど、こちらはあの映像を見て、危ない！轢き殺されるぞ！とハラハラしながら見ていたが、ちょっと考えるとよく分かるはずで、人権を無視し、人命を軽視する中国共産党が轢き殺さないほうが不思議である。中国得意の三戦にまんまとやられたといえそうだ。

「人権より国権」と言い切る鄧小平。外交官が現場で見た中国共産党の本質を日本外交に活かせなかったのが、日本外交の失敗の本質なのかもしれない。

ちょうど 2022 年の 9 月 29 日は日中国交正常化 50 周年にも当たっていたことから、節目の年に戦後の日中関係を振り返ってみるのに、ふさわしい書ではないかと思う。

（2022/10 森山博之）

---

本リポートに関する問い合わせ先：https://arc.asahi-kasei.co.jp/contact/